



シリーズ6 名寄市立大学図書館のあゆみ

その1. 短期大学の時代

本学の前身、名寄女子短期大学は1960年（昭和35年）に開学しました。当時の北海道には札幌圏に8校、函館に1校だけ短期大学がありましたが、名寄市のような人口3万人ほどの小さな自治体が設置できたのは大変珍しいケースと言えます。道北の女子の職業教育と地域の生活環境向上のため、短期大学の必要性を強く訴え、設置・開学の中心となったのが当時の池田幸太郎市長です。通常、大学設置審議会の現地調査までには校舎の8割程度は出来ていることが条件だったようですが、現地調査が行われた1959年11月時点では土台のコンクリートを流し込んだだけだったといいます。それでも池田市長は「土台が出来上がれば九分九厘できたも同然、それが公立というものです」と熱弁をふるい、その熱意が審議会委員を動かし認可が下りたという、ドラマのような展開があったと資料には残っています。そこから翌年春の開学に向けて冬にもかかわらず急ピッチで工事が行われます。

また並行して発足した短大期成会では、財政部会・広報部会・図書部会を組織し、そのうち図書部会では開学までに7000冊を目標に、その多くは献本に頼ったとの記述が当時の資料にありました。市内の学校・事業所・個人宅などにリヤカーを引いて回るという涙ぐましい苦難の道のりだったようです。

そのような全市民的な多くの協力・努力のもと、1960年4月20日、入学式にこぎつけました。まだ工事中の場所もあるなど様々な面で未整備なままのスタートでした。図書室も敷地を同じくする名寄家政高等学校（開学後は名寄女子短期大学付属高等学校）に間借りし、目標冊数には届かなかったものの3000冊ほど集めた図書

をとりあえず並べたような体裁での開室でした。それでも学生は非常に熱心に利用したようでしたし、図書室の狭さゆえに専門書を各研究室に分配する方式は、教員と学生の交流に役立ったようです。開学時は図書館担当職員もおらず、分類や配架といった作業も手探り状態だったと思われます。

当時の校舎は東1条北6丁目、現在のノースタウン団地の場所にありました。ご承知の通り、名寄は厳寒期には気温マイナス30℃にもなるという環境ですが、当時の校舎は名寄小学校改築に伴う廃材まで利用した木造でしたから、全くこの寒さは防げず苦勞が絶えなかったことは



開学当時の校舎（東1条北6丁目付近）

容易に想像ができます。

1964年には大学校歌が制定されました。作曲は『ゴジラ』をはじめ数々の映画音楽で有名な伊福部昭氏。自筆の楽譜が今も図書館の書庫に保管されています。

開学から5年、1965年に記念事業として待望の図書館が新築されました。総工費610万円、15,000冊収容可能という規模です。当時の図書原簿によると蔵書冊数は7000冊くらいに増えています。この後、市の財政難によって短大の維持困難が予想され、道立への移管か、はたまた廃学かという危機も訪れますが、それを乗り越え学科改組などの将来構想が盛んに論議されていきます。



1965年に新築された図書館

1977年には図書館の一般開放を実施、1984年には家政学科に児童専攻課程を新

設、図書館には幼児教育関連の図書・絵本が増加しました。企画展として「世界の絵本展」なども大学祭を中心に数回開催されていました。

やがて開学20周年を迎える頃から校舎の老朽化も進み、新校舎建設の協議が始まっていきます。移転先を巡っては、当時の短大所在地・日進地区・大橋地区の苗圃跡地（現在地）、更に徳田地区からの誘致もあり、4か所の候補地を巡ってなかなか紛糾したようですが、隣接する公園予定地を含めた「公園大学」構想に決着します。

1986年、新校舎の建設が始まり、翌1987年に現在の場所に移転します。現3号館・模擬保育室の場所に新図書館もオープンしました。総面積はおよそ390㎡、閲覧室は60席で、事務室内には電動集密書架も設置されました。大学公園に面した大きな窓から四季折々の風景が楽しめる良い空間でした。円形の広場の外周に記念植樹された桜が現在は大きく成長し、春に多くの目を楽しませてくれます。

1990年、開学30周年の年、市立名寄短期大学と名称を変更し、男女共学制が施行されました。1994年には



大学公園から望む旧図書館

看護学科が新設されました。看護学科設立にあたり関連図書8000冊強、専門雑誌も50誌ほど増加し、その受入処理に忙殺されたことが想像されます。コンピュータによる独自の管理システムも職員によって開発され、従来の手書き目録カードからパソコンでの蔵書検索へと電子化も進み始めました。ただ独自システムでは機能の面で限界があったため、2003年にはようやく図書館システムLibMax・Libfinderが導入されましたが、1冊1冊手入力での登録作業は時間もかかり、すべての図書の登録はまだ先

のこととなります。またインターネット環境も普及し、医学系のデータベースも導入されていきます。看護学科の看護研究には文献検索が必須ですのでそれに対応して文献検索ガイダンスも行われるようになり、図書館の学習支援機能も広がりが見られるようになりました。この頃学生数は480名ほどになっていましたので座席の不足は否めず、同規模の他大学図書館と比較してもその狭さは歴然としていました。当時の図書館運営委員会報告等には「閲覧スペース、座席数、書架等は物理的に限界を超えた不足状況にある」「図書館機能の充実、サービ

ス向上には職員の増員が必要」などの記述があり、深刻な局面を迎えていたことがわかります。（次号へ続く）

【参考】『私の回想録』（1990）池田幸太郎/著

『写真でつづる市立名寄短期大学 40 年のあゆみ』（2000）市立名寄短期大学 40 周年記念事業委員会・市立名寄短期大学同窓会

『名寄女子短期大学十五周年記念誌』（1975）名寄女子短期大学

『市立名寄短期大学三十年史』（1990）市立名寄短期大学

『なよろはじめて物語』（2004）名寄市北国博物館（谷 紀美子）



卒業論文完成への道



今年度も、卒業論文の提出が終わり、学科ごとに「卒業研究報告会」が開催されています。卒業論文を書き終えた学生 2 名の方に、どのように取り組んだか、図書館をどう利用したか、といったことについて感想を寄せていただきました。

卒業論文を書き終えての感想

社会福祉学科 はやしざき あきと 林崎 朗冬

私は今回、「障害を持っている方の自己決定権について」というテーマのもとで卒業論文を作成しました。調査方法としては、書籍や新聞からの文献研究に加え、地域にある障害者支援施設で 1 ヶ月近く支援を手伝わせていただき、現場職員の抱える葛藤に焦点を当てて考察を行いました。

卒業論文を書くにあたって特に苦労をしたのが、現場での経験を文章にすることでした。私は文章を書くことがあまり得意ではないので、内容を仕上げていく時期はバイトやサークルの仲間に「いつも図書館にいる。Mr.図

書館」と言われるほど図書館に通い詰め、作業を行いました。今思い出しても決して楽ではなかったです。ですが、今考えると卒業論文の作成は本当に貴重な経験でした。利用者さんと共に活動をしたこと、職員さんの抱える悩みや葛藤をお聞きしたこと、それらを何度も考えて自分の言葉にしたこと、どれも今後の自分の糧になっていくのだと思います。

これから卒業論文に取り組む人は自分の興味の手持てることをテーマにするのが重要なように感じます。卒業論文は長丁場です。私のように文章を書くことが苦手な人にとっては苦労をする場面もあるかとは思いますが、あまり悩みすぎず、楽しみながら頑張ってください。



私は、「フェリクス・ホフマンの絵本からみえるもの」というテーマで卒業論文を書きました。4年間保育を学んできた中で絵本分析への興味が強くなり、特にホフマンの作品の魅力に惹かれていたため、このテーマにしました。研究では、ホフマンの絵本である『ねむりひめ』（絵/フェリクス・ホフマン 訳/瀬田貞二、福音館書店、1973年）と『おおかみと七ひきのこやぎ』（絵/フェリクス・ホフマン 訳/瀬田貞二、福音館書店、1967年）の分析だけでなく、ホフマンと家族の関係や、絵本作りを始めたきっかけなども知りました。研究を通してホフマンの作品について初めてわかることがとても多く、楽しんで論文に取り組むことができました。

文献を基にした研究だったため、ホフマンに少しでも関係のある書籍を探すことがとても大変でしたが、図書館の文献リクエストを利用し、多くの文献に目を通すことができました。また、他大学から文献を借りたり、雑誌の記事のコピーを取り寄せたりなども、図書館で行うことができ、より深い論文内容の検討をすることができました。

私はホフマンの絵本分析を通して、何気なく読んでいた絵本の見方が変わりました。挿絵や場面構成、文章との関係などを分析したため、ホフマンの絵本だけでなく絵本そのものの学びを深めることができた卒業研究だったと感じています。



図書館の展示

図書館では職員が交代で Facebook 上に【今週の本】としてお薦めの図書を紹介しています。また、名寄市の広報誌には大学のページ「名寄市立大学の窓から～知への誘い～」がありますが、そこでは内容に関連した図書を紹介しています。2階カウンター前に展示しています。



図書館だより 2019 年度第 4 号
2020 年 2 月 20 日発行
名寄市立大学図書館運営委員会

名寄市立大学図書館
〒096-8641
名寄市西 4 条北 8 丁目 1 番地

